［2020年度 優秀賞］

W. M ヴォーリズの建築から見る都市

福本　千尋

はじめに
第1章　W. Mヴォーリズの精神
1. W. Mヴォーリズとは
2. W. Mヴォーリズの思想構造
3. W. Mヴォーリズの建築の特徴
第2章　日本の近代化との関わり
1. 近代化とキリスト教事業としての経済活動
2. ヴォーリズの大学建築と都市コミュニティ
第3章　フィールドワーク調査
おわりに

はじめに

ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（William Merrell Vories, 1880-1964. 以下、本稿では、W. Mヴォーリズと統一する）が設計を手がけた学校、図書館、病院、郵便局、銀行、デパート、ホテル、教会、個人住宅など1,600もの建物は日本全国に残されている。美しく、機能的なそれらの建物は日本の近代化の中で人々に愛されながら使われ、都市の発展に大きく関わってきた。しかし現代では彼の建築物の役割は、地域発展の観光資源として生まれ変わりつつある。本稿では、変容する都市の中で長く残されてきた彼の建築から都市が、どのように作られていったのかということを明らかにする。そして、膨張する都市の発展の中で、建築物の保存・再生はそれに逆進しているのかどうか、建築と都市の関係について考察することが本稿の目的である。

滋賀県民にとってヴォーリズの建築物は、住民が主体で保存再生活動を行ってきた象徴のようなものである。滋賀県に住む筆者が幼少の頃は、滋賀県犬上郡豊郷町立豊郷小学校の解体を進める自治体と、それに反対する保存運動を行う住民との対立がローカルテレビのニュースで日々報道されていた。そして、今では住民主体で始まった保存再生活動は全国に及び、様々なヴォーリズ建築を保存再生する動きが見られている。その結果、2009年時には、登録有形文化財となったヴォーリズ作品は、ひとりの建築家の作品としては最も多い37件にのぼっている[1]。そこで、なぜ彼の作品は保存再生の代名詞となりえるのかということに疑問を持ち、建築物の保存再生がこれからの都市の発展に必要な要素になるのではないかと仮説をたてたことが本研究の背景となっている。

本稿における研究の目的と構成について述べておきたい。本研究の目的は、保存再生されるW. Mヴォーリズの建築の特徴を知ることで、これからの都市の発展に繋がる建築を明らかにすることである。まず、第1章と第2章でW. Mヴォーリズの精神性と日本の近代

化との関わりについての文献調査を行い、第3章でフィールドワーク調査、おわりにでは、それらの調査及び考察をふまえたうえで、結論を述べている。本稿はこれらの章で構成されており、これにそって、論じていきたい。

第1章　W. Mヴォーリズの精神

1. W. Mヴォーリズとは

William Merrell Vories（1880年10月28日 - 1964年5月7日）はアメリカのカンザス州レブンワースに生まれ、日本で数多くの西洋建築を手懸けた建築家であり社会事業家であり信徒伝道者として知られている。熱心なクリスチャン家庭で育ち、6歳の時にアリゾナ州フラグスタッフに転居し大自然に触れたことで、彼の中で自然志向ともいえる心性が生まれる。この経験は病弱だったヴォーリズに肉体的健康だけでなく、精神的健康ももたらし生涯にわたっての彼の性格の基礎となっていった。高校時代には建築と建築デザインに興味を抱き、大学進学後も数年にわたり情熱的に学び、建築家を目指していた。

しかし学生YMCAの活動に取り組み、海外伝道学生奉仕団員となったことで、彼はキリスト教伝道の志を強くさせていった。アメリカで建築を学ぶ一人の学生だった彼が、海外への伝道活動に導かれていった理由について『アメリカ人教師の日本体験記』(2008) によると、ヴォーリズは以下のように述べている。

> 決定的な影響の第2は、1902年にカナダのトロントで開かれた世界キリスト教学生同盟大会でした。私はコロラド大学学生YMCAの代表としてこの大会に派遣されました。そこで私は、それまで断片的に心に訴えかけてきていたものが、理由と根拠全て一体となって見事に目の前で整理されることを経験します。そして、その濃縮された効果は決定的であると思われました。しかしその時でさえ、最終的な判断は数か月後まで先延ばしにしました。後で興奮状態の中で決断を下したと気づき、後悔することを避けるためです。そしてついには、海外宣教学生奉仕団 (SVM) のメンバーになることで、私は自分の意思を公に宣言することとなりました[2]。

このSVMは19世紀に起きた米国での宣教師運動の推進役となった学生たちが、自発的に外国伝道に参加していった運動体で、当時のアメリカの社会活動の特色の1つであるキリスト教に根差した運動とその組織の代表例である。大学YMCA（キリスト教青年会）の一員だったヴォーリズは熱心なキリスト教徒ではあったものの、労働の金銭的成果を宣教活動にあてることでその大義を果たそうとしていた。しかしヴォーリズが参加した、トロントで開かれたSVM第四回世界大会は、大会の2年前である1900年に中国で起こった義和団事件の後の初めての大会という特別なものであった。義和団の暴動によって白人宣教師、中国信徒ら多数が殉職したという衝撃的な事件はSVMの学生にとって他人事ではなく、実際に事件を目の当たりにしたハワード・テイラー夫人のジェラルディンの講演はヴォーリズの心を動かしたのだろう。奥村 (2005) によるとテイラー夫人は、第二回講演の最後に以下のように問いかけたとされる。

私には主イエス以上に導く大切なものはありません。何一つありません。あなたにはありますか。キリストご自身を得るため、あるいは人々の霊魂の救いというキリストの尊い業に従っていくために、自ら喜んで一切を投げ出すことを妨げている何かが、今日ただいま、あなたの心の中に、あるいは人生の歩みの中にありますか[3]。

この時ヴォーリズは、建築家になる自分の望みという自我の罪に気付き、それが神に従うことに拒んでいたことを知らされた。「理由と根拠全て一体となって見事に目の前で整理されること」というヴォーリズの言葉は、生涯の転機となったこの宗教体験を表しているのだろう。この体験以来、ヴォーリズの目標は海外宣教となり、大学3年生ではそれまでの理系の建築コースから哲学コースへの編入を行い、着々と卒業後の海外宣教の準備を進めていった。

そして大学卒業後、YMCAの紹介で滋賀県立商業学校英語科教師の求人に応じて、1905年に来日し、近江八幡市で、放課後に開いたバイブルクラスを発展させ、八幡YMCA会館（八幡基督教青年会館）建設を契機に、関西を中心にした設計活動も開始した。このような中で、全国で初めての中等学校における学生YMCAが創立されたが、やがて仏教徒を中心とする反対勢力が県議会にまで及び、1907年には 教職を解かれてしまう。しかし、その後1908年には京都で建築設計監督事務所を設立し、日本各地で西洋建築の設計を数多く手懸けた。学校、教会、YMCA、病院、百貨店、住宅など、その種類も様式も多彩である。その作品はいわゆるアメリカンスタイルとして、住宅やオフィスビルに新しい作風をもたらすものとなった。ヴォーリズは教職を解雇されてからも伝道活動は続けており、YMCA活動を通して近江ミッションを設立し、信徒の立場で熱心にプロテスタントの伝道に従事した。近江ミッションではヴォーリズの妻の満喜子夫人を中心として様々な教育活動が行われ、現在の近江兄弟社学園の学校教育の基礎が築かれた。また、ヴォーリズはヴォーリズ合名会社の創立者の一人となり、メンソレータムを広く日本に普及させた実業家としての一面も開花させていく。このようにして、伝道、建築設計、教育、医療、会社経営、出版、青少年活動といったヴォーリズの幅広い活動は、様々な形で日本中に残ることとなった。

2. W. Mヴォーリズの思想構造

W. Mヴォーリズは滋賀県近江八幡市において、全国に名を知られたユニークなキリスト教伝道団「近江ミッション」の創立者として知られている。これは現在の近江兄弟社の元となった組織であり、ヴォーリズの思想が最も表れた活動のひとつだろう。この近江ミッションについて奥村(1982)は以下のように述べている。

ヴォーリズの推進した福音船「ガリラヤ丸」による湖畔伝道やモダンな結核療養所等を含む一連の伝道強化事業は、彼の本領でもあった建築設計管理の他、製薬等の産業部門によって強力に支えられ、自給自立の綜合伝道団「近江ミッション」(Omi Mission)として、特に大正から昭和にかけた一九二〇~三〇年代を中心として全国にその名をはせたのであった[4]。

このようにサナトリウムや建築設計、製薬などで人々の生活環境の改善を行ってきた近

江ミッションは、基督教青年会であるYMCA運動に大きく関わっているとされる。キリスト教青年会、通称YMCAは2020年の現在も幅広く活動されている世界的な組織のひとつである。アメリカ人であった彼を、遠く離れた日本への伝道に突き動かしたこのYMCA運動とは一体どんな活動なのか。奥村(1982)は以下のようにまとめている。

> 周知のようにY・M・C・A（基督教青年会）は「目的」をもったグループの運動であり、神学や教義よりも、福音の実証としての倫理や生活の向上により深い関心を持つ。その目的とは「青年の生活を正しくし、しかも青年自らの手でそれをなすこと」であり、そのためには精神的状態を改善しなければならず、それは青年をイエス・キリストに導き、またキリストによって導かれることを意味した。やがてそれに知的なもの生活的なものが加えられ、聖書研究会や祈祷会の他に読書会・講演会・出版事業、宿泊などのプログラムが組まれるようになる。したがってその「場」としての「青年会館」が必要となり、さらに全生活の改善という見地から身体の健康が重視され、スポーツやレクリエーションがプログラム化されるようになって、体育館やプール等が建てられていく[5]。

ここから、来日して二年目という早さで、ヴォーリズが自身にとって初めての設計である八幡基督教青年会館を建設した理由が見て取れる。YMCA運動の一環として、場としての青年会館から教育と身体の健康水準を上げ、人々の生活の向上を目指したのだろう。このとき、キリスト教の普及はもちろんのことだが、それ以上に生活全ての改善という大きな目標があったことが伺える。以上のことから彼の思想構造の中心にはまずYMCA運動とその思想があったことが明らかとなろう。

ここで重要視されるべき点は、近江ミッションは教会でも教派でもないということである。ヴォーリズの来日から11年が経過した頃、組織の目的や方針を表明する近江基督教伝道団綱領が制定された。この綱領は基本方針として特定の宗派・教派・教団に属さないキリスト教である非教派の宣言となっている。以下の通り、制定当初の綱領では「教派に関係なく」という言葉で教派に属していないことが一番に触れられている。

近江基督教伝道団綱領[6]

（一）本団ハ近江国ニテ教派ニ関係ナク、基督ノ福音ヲ宣伝スルヲ目的トス。
（二）本団ニテハ特ニ教会ヲ設立セズ其導ケル基督者ノ団体ガ経済上ノ独立ヲナスニ至ル時ハ其団体ノ選択ニヨル教派ニ属セシム。
（三）本団ハ本邦人及外国人団員ノ完全ナル協力ヲ実現スルニ勉ム。
（四）本団ハ新教諸派ニヨリ伝道サレザル地方ニ福音ヲ宣伝シ、現在伝道サレツツアル地方ヘハ、如何ナル事情アルモ、新ニ伝道スルガ如キ事ヲナサズ。
（五）本団ハ主トシテ田舎伝道ニ努力ス。
（六）本団ニテ福音宣伝者ノ養成ヲ計ル。
（七）本団ハ禁酒禁烟、貞潔、思想ノ向上、結婚習慣ノ改革、体育衛生ノ進歩ヲ計リ、又貧民及特殊部落（原文ママ）ニ対スル適当ナル運動ヲ含ム社会風教ノ改善ヲ計ル。

（八）本団ハ福音宣伝ニ関スル新方法ヲ研究シ之ヲ実験ス。

この綱領もYMCA的な、様々な宗派が協力し宣教や伝道の目標の達成を目指す超教派思想が元となっている。このことはヴォーリズの教え子であり、近江兄弟社の創立者の一人である吉田悦蔵も綱領の解説の中で以下のように述べている。

…要するに宗派心は、基督の御心よりして、百害あって一益する所はない。然るに在来因習と惰力が手伝って、思い切って宗派に超越することが出来ず、今に逡巡躊躇して居るが、今日の所謂基督教会の現状である。（中略）我々団員は、ここに目醒めたのみならず、今の宗派捕はれつつある教界に一警醒を与ふる為に、純粋に基督の道を伝へ、敢て宗派の伝道をせない（原文ママ）決心をして此一項を公にしたのである[7]。

もともとキリスト教の中でも様々な教派が存在することで対立を生んでいた背景がある。そのうえ日本では仏教や神道といった諸宗教との対話も必要となっていたと考えられる。伝道という目標があるにも関わらず、宗派といった既存の枠にとらわれていた他の在日宣教師や既成教派に対して苦言を呈する形でこの綱領は宣言された。近江の地でヴォーリズの思想が残った背景には、キリスト教に縛られすぎない、超教派思想を更に強めた非教派思想が関わっていたことが分かる。

また、綱領の（五）では「田舎伝道」という言葉が出てくる。ヴォーリズにとって地方小都市・農漁村を国家、あるいは人類生存の根本と考える思想があったことが分かる。このことについて奥村（1982）は「当時の宣教師たちの大都市集中に対する反発が込められていると考えられる」[8]とも述べている。しかし実際にヴォーリズが自然や農山村を重要視していたのは事実であり、彼の建築にも表れている。この自然派思想は彼が幼少期を過ごしたアリゾナでの生活の中で養われたもので、後年の彼のミッション事業のひとつである理想的な農場と農村神学校のビジョンに繋がっていく。

綱領（六）では被差別部落についての問題に着目し、その解決に努力する方向を取り入れたことも注目されるべきことである。実際に1935年には「大林こどもの家」という常設保育所事業が当時近江八幡市にあった被差別部落に開設されるなど一定の成果を出している。綱領（六）の中で使われている言葉は現在では不適切とされるものも多いが、当時水平社運動や融和運動が始まったばかりであるという時代背景を考えれば評価されるべきことだろう。これらから見られるヴォーリズの兄弟愛や平等主義はYMCAの国際協調精神とも共通するものであったと考えられる。このことについて奥村（1982）は、「事実『近江ミッション』では欧米人・東洋人の区別なく平等の立場で働くことができたし、特に朝鮮人を正しく位置づけていたことは、当時の政治社会情勢から見て評価されてよい」[9]と一定の評価をしている。

彼の思想構造の中心はYMCA運動、近江ミッションの綱領など様々なところから見えてくるが、これらから形作られた思想こそ彼が天与のビジョンとしその実現に生涯を捧げた「神の国」思想である。彼は一種の理想社会のようなものを近江の地につくり、それが成功すれば世界にも広げることが出来ると信じていた。奥村（1982）は「神の国」思想について以下のように述べている。

ヴォーリズは、現世の生活について「天父への信頼と兄弟愛」の二大原則を重んじ、むしろ地上にその理想を実現しようと願ったのであり、その「ハイエロファニー」(hierophany)としてミッションの諸事業が形成されていったと見ることができる[10]。

つまり、ヴォーリズは現代の世に生きて働くキリスト教経済原理の社会を形成したかったのではないかと考えられる。彼のルーツであるピューリタン的思想から禁酒禁煙、克己節制、貞潔、そしてYMCA思想的な倫理生活の向上や全人教育の思想、保健衛生に留意し神から授かった身体を健康に保つこと。それらすべてが叶う場所の形成こそ彼の「神の国」思想であり、ヴォーリズの思想構造だと考えられる。

3. W. Mヴォーリズの建築の特徴

第一に、ヴォーリズの建築の特徴の一つとして住む人の健康に気を遣った設計が行われていたことが挙げられる。彼が設立した財団の「近江基督教慈善教化財団寄附行為」第一条から衛生思想について言及されていることからもヴォーリズがこの問題にいかに真剣に取り組んでいたか分かるだろう。

…一九一八年(大正七)三月、「近江基督教伝道団」を法人化して設立した「近江基督教慈善教化財団」(現・財団法人近江兄弟社)の目的として「基督教主義ヲ以テ慈善救済ヲナシ且ツ各人ノ霊性知識身体ノ修養ヲ奨励シ、殊二衛生思想ヲ普及スルコト」[11]

ここから精神、知識、身体というYMCAの三つの原理に通ずる言葉が出てくる。また前節の思想構造にも関わることだが、彼のルーツであるピューリタン的思想の中に身体が神からの預かりものであるという宗教的思想が存在する。彼にとって人々の身体の健康を保つことは生涯の中で取り組むべき課題であった。特に当時の日本では多くの青年たちが肺結核を患っていた。その肺結核の予防のために新鮮な空気や太陽の光線の重要性について様々な場で語っている。実際に、彼は経験に基づいて「…家と健康とに密接な関係があるということを覚って来る」[12]と述べている。また、戦後まもなくになってからも京都大学YMCAの寮に親しく訪れ、結核対策のために窓を開けて新鮮な空気と日光を取り入れるように学生にすすめた。そのため、彼にとって建築の中心には、住む人や使う人の衛生思想の普及があったと考えられる。

第二に彼の建築物の中で特徴的にミッション系の学校、YMCA会館や教会といったミッション建築、そして何より住宅建築が多いことが挙げられる。ヴォーリズの中には理想的住宅建築の姿があり、それについて彼が講義した内容が『吾家の設計』[13]という本にまとめられている。やはりそこには、住む人の健康を守るために新鮮な空気と日光がキーワードのように出てくる。しかしそれだけではなく、何より家族団欒の中で子供がしっかりと遊び学習し、健康に育つことができる家を理想としていることが分かる。実際に彼は、「第一に子供のために。これは自然の本能から説明できる。子供の健康、子供の教育、これらに合しないもので、吾々どうして満足することができましょう」[14]と述べている。家族が集まるリビングルームについても、「…リビングルームはむろん、一人ずつではなく、そこに家庭あるいは家族の者が集まって、子供とも顔を合わせ、一家団欒の楽しい生活ができる

ように設備したい」[15]と述べている。住宅の根本目的は子供にとって居心地の良い空間にすることだという考えである。また、彼は自らのアメリカンスタイルを押し付けるのではなく、日本人の生活や習慣をよく理解した上で、より健康に健やかに家族が暮らせる住宅を目指した。そして、この『吾家の設計』が出版された年には関東大震災が起こる。建物の倒壊や木造建築による火災の広がりといった事故から、日本人の住宅意識の改革が重なったこともヴォーリズ建築が世間に広く求められた要因になっているのではないだろうか。

次に、建築デザインの側面からヴォーリズ建築の特徴を考えてみる。彼の建築を二つの時代に分けると、「…赤レンガ建築及び木造コロニアル建築が多い大正期と、鉄筋コンクリートを主要構造として、種々の様式をデザインした昭和初期時代」[16]に区分される。彼のデザインは、建築デザインの発展といった新しいものではなく、伝統的なアメリカの建築様式の手法を応用したものであり、彼自身は様式主義の建築家に分類されている。しかし、その洗練された様式的デザインから、「アメリカ建築の紹介者、西洋建築の解釈者、様式応用の協力者」[17]とまで言われている。ヴォーリズ建築のデザインの基となったのはアメリカの代表的住宅作品の多くに応用された4つの建築様式である。それは、「コロニアルスタイル、スパニッシュスタイル、チューダースタイル、イタリアン・クラシック」[18]と呼ばれるものでアメリカの19、20世紀初頭に見られる住宅建築の一般様式である。伝統的様式主義をとりながら、合理的で現実的な近代住宅を目指し、設計者の個人的名誉よりも住む人の健康と活動の能率を上げることを重視した。大正、昭和初期の時代に日本で、日常的な住居のためのアメリカンスタイルの西洋建築がヴォーリズによって確立されていった。

ヴォーリズ建築の特徴として、健康な身体の維持に、使う人を第一に考えた機能性、そして高い芸術性が挙げられる。ヴォーリズの設計には、外観だけではなく、実際の機能性や長く大事に使う工夫、そしてなにより風土や建物を使う人に寄り添う精神が見られた。さらに家族や隣人とのつながりなど、地域社会のコミュニティを育みやすいような空間に工夫されている。ヴォーリズは何よりも「人の住居はその人を現わす」[19]と位置づけ、建築が人間の精神性や成長にまで影響を与えると主張していた。そのため建物自身からのメッセージ性を感じることが出来るのではないだろうか。

第2章　日本の近代化との関わり

1. 近代化とキリスト教事業としての経済活動

近江ミッションは、国際YMCA同盟に加盟していたものの、特定の宗派や教会に属さない超教派のため、経済的には独立していた。近江ミッションの設立にあたり、経済面で重要視すべきことは二点ある。それは来日後三度目の渡米をした際に、メンソレータム社の創業者であるハイドの知遇を受けたこと、そしてコーネル大学SVMの出身者で建築家のチェーピンを仲間に加えたことだ。このハイドとの出会いは、後に咳止め薬であるメンソレータムの日本代理店、という製薬事業に繋がっていく。渡米後ヴォーリズはチェーピンを伴って帰国し、1910年12月には最初の法的組織として「ヴォーリズ合名会社」を設立した。その後は順調に建築設計管理の仕事を生業として、財源を確保することに成功した。

このように、近江ミッションの資金源として建築設計の仕事は開始されたが、残された

建築作品はその後何十年にもわたって、設計者の精神を伝えるヴォーリズ建築として愛されている。それは何より、近代化が進む中で都市の景観や市民生活が変貌し、西洋建築が広く大衆に受け入れられたという時代背景が関わっているだろう。そのうえ、彼は和室の配置や玄関の設置など、日本人の生活スタイルに寄り添って設計された和洋折衷スタイルを生みだした。山形(2018)は彼の住宅作品について、以下のように述べている。

> ヴォーリズ建築事務所における住宅作品は総じて、米国の近代住宅をモデルとして近代的改善を加え、わが国の住環境に適合した住宅であり、こうした邸宅作品に数えられる一群と、快適で文化的と言われる相当数の上質の洋風中流住宅を残したのである[20]。

近代化していく都市のなかで、彼の建築は中上流階層の日本人に求められ、先進的な住宅モデルを確立していったと考えられる。初めのうちは名家の邸宅建築が多かったが、大正後期から昭和初期にかけて非クリスチャンである、一般の日本人の住宅建築が急増していった。ヴォーリズ自身もその変化に関心と興味を持っていたと考えられる。その理由として、山形(1988)は以下のように考察している。

> …一般日本人のために良質の西洋館を設計することは、キリスト教によって培われた西洋の文化を最も具体的に物語るものであって、クリスチャン精神の宣伝になるものだと考えていた。この意味でヴォーリズの建築と、伝道活動は重なっている[21]。

また、この頃様々な商業建築が近代化によって建設されており、ヴォーリズも70棟余り残している。ヴォーリズがミッション建築を多く手掛けていたこともあり、他の建築家と比べると数は少ないように感じる。しかし、「大阪に建った大正期オフィスビルの名建築と誉れ高い大同生命ビル、個性ある装いで知られる心斎橋の大丸百貨店」[22]など広く世間に知られているものが多々ある。ヴォーリズの商業建築の特徴は、西洋建築の様式を装飾的に応用しているところである。心斎橋の大丸百貨店と、京都四条大橋たもとの東華菜館について、山形(2018)は以下のように分析している。

> 建築意匠の要点は二つある。遠景として眺める建物のシルエットと、玄関まわりに集中的に凝らされて目のあたりにする装飾の効果である。そのことによって商業的効果を挙げ、また、街にあって恰好のランドマークとして記憶されている[23]。

ここでランドマークという言葉が出てくるが、近代都市として都市文化が発展し、建築物が密集していくなかで、都市の花形になる建築物をヴォーリズは目指したのだろう。そしてそれは、これら商業ビルの建築を依頼したクライアントたちの希望であったと考えられる。また、ヴォーリズ建築は関東大震災においてほとんど被害を受けなかった。ヴォーリズは、被災したが破壊されなかった建物の特徴として「材料もよく、建築のときの注意が行き届いている」[24]ことを挙げている。耐震耐火の、鉄筋コンクリート構造の初期的建築を用いたヴォーリズの都市建築は、震災後である当時の需要に応えたものであった。

2. ヴォーリズの大学建築と都市コミュニティ

日本でのミッションスクール設立は明治期からで、その多くが大正から昭和にかけてキャンパスの整備を図り、確立していった。その流れから、ヴォーリズ建築事務所では、大正から昭和初期にかけて多数の学校建築を行ってきた。大半は北米プロテスタントが設立するミッションスクールでその数は43校に及ぶ。また、そのうちの20校余りではキャンパス・プランニングを伴う校舎群の計画を行っている。今回はその中でも、それぞれ戦前と戦後に設計された関西学院大学と国際基督教大学を取り上げて考察する。

(1) 関西学院大学西宮上ケ原キャンパス

関西学院大学西宮上ケ原キャンパスは、ランドスケープを含む設計をヴォーリズが手がけ、1929年に竣工した。ヴォーリズは正門から時計台、六甲山に至る縦軸を主軸線、及び直交する２つの横軸を副軸線と位置付けた。副軸線上ではそれぞれ向かい合わせに建物が立ち、中央芝生を中心として立ち並ぶ時計台、経済学部、文学部、神学部の各塔は現存するものも多い。当時上ヶ原キャンパス七万余坪の広大な敷地の大半は将来の大学キャンパスとして計画されたもので、校舎だけでなく学生寮や外国人教員住宅が緑豊かな環境の中に配置されていた。オープンスペースである広場を中心に秩序的に建築物が並ぶ姿は圧巻である。また、山形(2018)によるとこのキャンパスは「昭和初期にこの近郊に数多く建てられた、スパニッシュ・スタイルをとる洋風住宅の源となった」[25]とある。キャンパスを中心に建築デザインが統一された建物が立ち並ぶことで、ひとつの学園都市を実現させたと考えられる。

上ケ原キャンパスではすべての建物がスパニッシュ・ミッション・スタイルという建築様式で統一されている。スパニッシュスタイルはもともとスペイン支配時代のカリフォルニアのローカルな建築様式だったが、1900年ごろからリバイバルされ当時の建築家によって洗練された建築デザインとなっていた。これを基に、カリフォルニアミッションの伝統を反映したものがスパニッシュ・ミッション・スタイルである。このスタイルのデザインの特徴は「左右対称の外観を基本にし、開口部の半円アーチと屋根の中央に立つ曲線状の妻壁が特徴で、装飾的なスパニッシュのイメージよりも静かで割合に簡素な表現」[26]である。実際に上ヶ原キャンパスもアーチ状の飾り窓が多く見られる。

1977年からは、大学と日本設計が協働し、その当時の歴史的建築群を保存活用しながらの整備計画が始まった。その活動は40年にも及び、時代によって変化する教育環境に柔軟に対応しながらキャンパスのトータルデザインの統一を図った。ヴォーリズの設計した歴史的建築群に、ブレースなど耐震補強の跡は見当たらず、阪神淡路大震災の際も古い建物の被害は少なかったという。日本設計関西支社（2017年当時）の浜正樹氏によると、「耐震性能を満たしているものが大半で、オリジナルの建築の改修では、あまり手を加えていない。老朽化したサッシの取り替えや、建物の使い方に合わせた設備の更新が主眼になっている」[27]とある。ここから、ヴォーリズの設計した建築物がいかに頑丈で、長く使われることを念頭に置かれていたのかということが見えてくるのではないだろうか。今後の整備計画について、関西学院総務・施設管理部（2017年当時）の久保恵一郎氏は、以下のように述べている。

関西学院として、キャンパスは重要な経営資源だと認識している。引き続きシンボル的な建物は長寿命化を図る。教育現場の変化には、例えば中央講堂の新築時に、ラーニング・コモンズを設けるなどで対応してきた。今後も既存の建物の用途変更や建て替えなどで更新を図る[28]。

以上のように現在に至るまで、関西学院大学は、ヴォーリズの設計したキャンパスを学園のシンボルとして保存、活用している。また、周辺の住民にとっても街の景観を構成する主要なランドマークとして広く浸透しているのだろう。

(2) 国際基督教大学

国際基督教大学（以下、本稿では、ICUで統一する）は、戦後の復興の中、40万坪という広大な土地に設立が計画された。終戦直後に日米のキリスト教徒の間で新大学設立の動きが高まり、戦後の大学としてリベラルアーツの単科大学からスタートする。これは晩年のヴォーリズの集大成ともいえる仕事となる。戦時中、この広大な土地は中島飛行機三鷹研究所として戦闘機生産の拠点となっていた。しかし戦後、主要な建物の多くは本館や体育館として再利用されている。これは、当時まだ物資が充分ではなかったことに加えて、軍事利用していた建物を建て替えせずに、大学キャンパスに生まれ変わらせる平和利用という側面もあったのではないだろうか。

戦災復興の中で大学キャンパスと地域の結びつきをいかにしてデザインするかが課題となり、様々な建築家が取り組んできた。しかしヴォーリズのキャンパス計画で最も注目されるのは、小都市コミュニティの実現を目指していたことである。吉見（2019）はこの小都市コミュニティについて以下のように述べている。

彼は、大学キャンパスの中心にはシビック・センターを設置しなければならないと主張していた。このシビック・センターでは、市場の取引から、郵便局、旅館、床屋、修理屋、銀行、各種商店の経営を大学院生たちが担うことで、大学は彼らが社会で活躍する準備となる実習機会を提供するのだとされた[29]。

このことから、ヴォーリズは大学を単なる教育機関とせず、大学を中核とする文化的コミュニティとして発展していく都市計画のようなものを理想としていたと考えられる。結果として、周辺地域を巻き込んでの学園都市は実現しなかったが、ヴォーリズの都市コミュニティとしての大学という思想を現代に残すものとなっただろう。

これらは他の大学建築においても言えることで、吉見(2019)は「ICUキャンパスの構想は、南原繁総長の下で帝国大学からの転身に挑戦していた東京大学の戦後構想に通じる」[30]と述べている。大学キャンパスを、単なる教授の授業を学生が聞くだけの教室の連なりがある空間ではなく、無数の都市的要素を取り込んだ空間にして、キャンパスそのものを理想的な都市コミュニティとしていくことがICUの計画だった。反対に、東京大学のキャンパス設計は大学をキャンパスの内側だけに閉じ込めるのではなく、学寮生活の場を都市の中に展開し、地域に開かれたものにすることであった。キャンパスの内側に都市的要素を形成するのか、それともキャンパス自体が都市に溶け込むかの違いはあったが、都市と大学の

関係が重要視されているという考えは共通している。「リベラルアーツこそが、敗戦を経て軍部から脱しようとしていた東京において、新しい大学と新しい都市の共通理念だった」[31]と吉見（2019）は述べている。大学という高等教育機関で狭い専門領域のみを学ぶのではなく、都市の中で流動的なリベラルアーツや大学コミュニティを学ぶことこそ彼らが目指した新しい大学の姿であった。今後も、ICUのヴォーリズが設計した空間やデザインは、キャンパス空間の重要な根幹部分として継承・保存がなされていくと考えられる。

大学キャンパスは単なる私有財産ではなく、社会の中でランドマークやコミュニティ形成という役割を担っていることがヴォーリズ建築から分かった。大学には、単なるモノとしての意味だけではなく、建築物を通して世代を超えて継承される、精神のようなものがあるのではないかと考える。

第3章　フィールドワーク調査

筆者は、ヴォーリズ建築に実際に訪れ観察するフィールドワーク調査を行った。調査は2回に分けて行い、1回目は2020年2月17日に滋賀県犬上郡豊郷町にある豊郷小学校旧校舎を訪れた。2回目は2020年10月26日に大阪府大阪市中央区にある大丸心斎橋店本館を訪れた。調査の目的として、実際に訪れたことによる新たな気付きや、建物を使用した際の感想を得るためである。

(1) 滋賀県豊郷町立豊郷小学校旧校舎

（写真1）
（写真1～4　全て筆者撮影　2020年2月17日）

1937年にヴォーリズ設計のもと竣工した公立小学校である。（写真1）の通り、真っ白なその姿から、「白亜の殿堂」[32]と称された。そのうえ、鉄筋コンクリート造りの一部地上3階建てで暖房設備を備えた、当時の小学校としては先進的な建物であった。山形（2019）によると、「共にフラット・ルーフの直線的な構成の白亜の外観から、モダニズム・デザインをとるヴォーリズ建築といわれるのであるが、壁頂部には細かなアール・デコの装飾があ

り、柱型と縦長窓の構成にはクラシカルな均整感をそなえた建築」[33]とある。

実際に訪れて感じたのは、まず何よりも大きな窓から入る日光の明るさであった。校舎内は壁、天井ともに白いため、より光を反射し、廊下に電気がついていないにもかかわらず明るく温かみを感じた。また（写真2・3）の通り、手摺にはブロンズ製のウサギと亀の彫像が置かれておりヴォーリズの遊び心が見える。また、手摺には角がなく丸くなるように設計されており子供に優しい設計がなされていることに気付いた。また階段の段数を多めにすることで傾斜が緩く昇り降りしやすい、人に優しい階段になっていた。

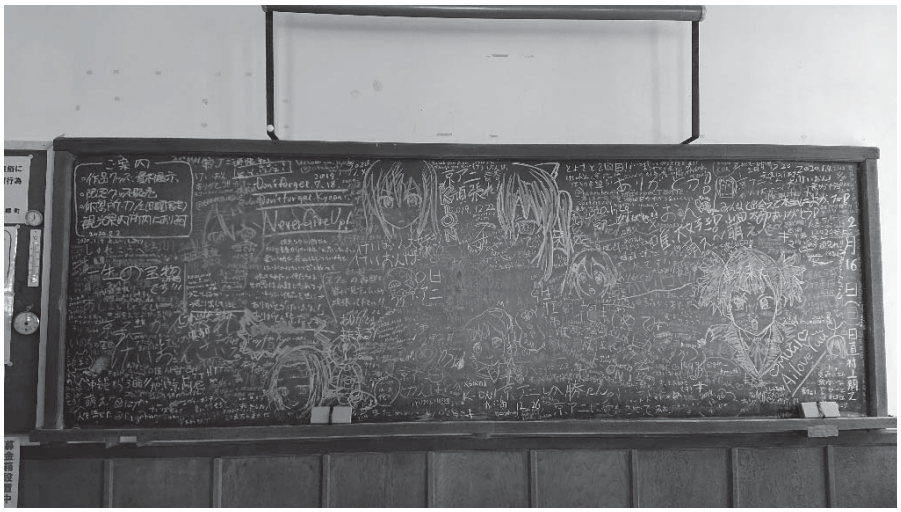
（写真2）

（写真3）

また、豊郷小学校といえば研究の背景でも述べた通り、校舎の保存問題で全国的に有名になったことでも知られている[34]。1999年に大野和三郎・前町長が当選してから、老朽化していた校舎の建て替え計画が具体化し始めていた。その結果住民の中から反対するもので2001年に「豊郷小学校の歴史と未来を考える会」が誕生しシンポジウムの開催や訴訟を通して保存を訴えてきた。その粘り強い活動の結果、2002年12月に敷地内に新校舎の建設をする方針に転換したが、旧校舎の利用方法についてはまだ何も決まっていなかった。

その後、2005年5月に豊郷町が「まちづくりプロジェクト委員会」を組織する。そして2007年12月に新校舎の建設費の損害賠償請求訴訟が和解したことにより一連の住民訴訟が終結した。和解の条件として盛り込まれた旧校舎を教育・福祉の関連施設として活用することなどから、住民側と豊郷町側で保存の方向性が絞られていった。改修工事は2012年3月に完了し、現在では図書館や子育て支援センターなど町立の複合施設として多くの人に愛されている。

耐震補強と大規模改修工事を担当したのは、原設計者のヴォーリズ建築事務所をルーツに持つ、一粒社ヴォーリズ建築事務所である。調査と設計に関わった一粒社の福永貴之主任（2012年当時）によると「新しく町の施設が入る校舎棟1階は、竣工当時に近い雰囲気に戻す。2階と3階については、手を入れながら使われ続けてきた味わいを生かし、最低限の補修に留める」[35]とある。



（写真４）

また現在は観光資源として、多くの聖地巡礼者が校舎を訪れている。アニメ「けいおん！」の舞台として校内の様子がアニメに描かれたこと、また様々な映画のロケ地として使用されたことから、それぞれの作品のファンが訪れて、新たな表現をコンテンツとして生み出している。（写真4）の黒板には訪れた人が好きなことを書き込むことができ、新たなコミュニティを形成しているように感じた。実際、筆者が訪れた際も黒板に書き込む人と軽い世間話をして、アニメを再現した写真撮影の手伝いをすることになった。初めて会う人と時間を共有し、コミュニケーションをとることができるという、観光地化されている建築物の可能性を感じることが出来た。

岡本（2013）によると、「アニメ聖地巡礼の旅行情報源は、大きく分けて二種類ある。一点目は、企業や自治体などが提供する情報である。二点目は、巡礼者や当該地域の住人などの個人が発信する情報である」[36]とある。豊郷小学校旧校舎においてはこのどちらも当てはまり、自治体、住民、巡礼者全てから情報が発信されている。また、聖地巡礼で校舎に訪れることによって、ヴォーリズ建築の良さを新たな層に広めるきっかけにもなっている。「実際に訪れ、この校舎の良さを認識して清掃活動に参加する人や、何度も通っているうちに豊郷町に住んでしまう人も出てきている」[37]とある。建築物からヴォーリズ精神が人に届き、保存活用のコミュニティが広がっていることを感じた。以上のことから建築物の保存と活用に必要なのは、何より地域や地元の人、そしてどれだけ多くの人に関心を持たれるかが重要なのではないかと考える。

（2）大丸心斎橋店 本館　大阪市中央区

御堂筋の拡張整備や地下鉄の開通にあわせて4度の増築を繰り返し、1933年に大丸心斎橋店がヴォーリズ設計のもと竣工した。この地下鉄開通に前後する時期は、「昭和初期のデパート文化隆盛時代」[38]だった。山形（2018）によれば、以下のように大阪だけでも多くのデパートが建てられていたことが分かる。

難波駅の南海ビルディングには高島屋が一九三〇年（昭和五）に総テラコッタのルネサンス・スタイルの新館を建築し、梅田の阪急ビルが同時代に建築されている。また、

大丸の北に隣接する十合百貨店は一九三五年（昭和一〇）、モダンなスタイルで開業した。この十合百貨店は、大阪で独立した建築家、村野藤吾の傑作として知られるもので、ガラス・ブロックとモザイク・タイルの壁面に長大なルーバーで外観を構成した建築が、伝統的様式をとる大丸と好対照をなしていた[39]。

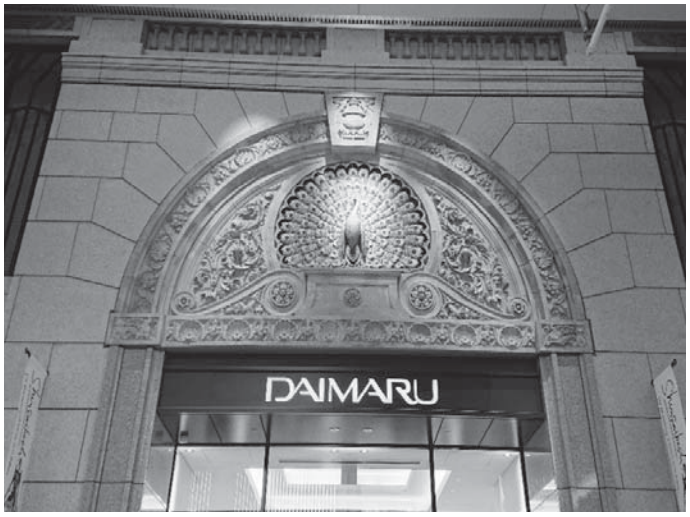
このように様々なスタイルの百貨店が建てられる中、大丸心斎橋店はネオゴシックスタイルを基本に、幾何学模様や装飾的植物模様を重ねるアール・デコ式の装飾モチーフをちりばめたデザインで統一されていた。アール・デコとは、1925年のパリ装飾美術博以降にアール・ヌーヴォースタイルに続く新しい様式として登場したスタイルである[40]。曲線的なアール・ヌーヴォーがハンドクラフトで非常に高価だったのに比べ、直線的なアール・デコはインダストリアルアートといった機械での大量生産とも調和できるデザインだった。当時は、「天井の高い1階フロアを中2階の回廊が囲み、その中央、最上階までの吹抜からガラス天井を通して光が降り注いでいた」[41]とあり、いかに豪華な造りであったかが分かる。

（写真5）
（写真5～10　全て筆者撮影　2020年10月26日）

その後、大阪大空襲で罹災した際も、8階を増築した際も当初の外観を損ねないよう再生が行われてきた。しかし、老朽化や耐震性の問題から、2015年12月に閉館し建て替えが行われることが決定し、2019年9月13日にグランドオープンを果たした。建て替えの際に、建物を惜しむ多くの声が届いたことから、旧本館内装から保存された1,254パーツのうち67%を再利用、一部外装もそのままになっている。建て替えを請け負った竹中工務店では、文化的価値が高い既存建物の外壁保存構法を開発し、初めて適用した例となった。外壁に使われていたタイル12万枚のうち約90%を保存した上で、各仕上げ材に約12万5千本のステンレスピンにより原則全数ピンニングして躯体と緊結することで安全性を高めている[42]。

（写真６）

（写真７）



（写真８）

（写真９）

（写真10）

天井などは竣工時の資料から、もとのパーツを活かして再現されており、（写真6）のようなアラベスク調の幾何学模様になっている。一階の化粧品売り場で周りを見渡すと、繊細で美しいアール・デコの装飾が全面に広がり、非日常感や高級感が演出されているように感じた。中2階から5階へと移転した喫茶「サロン ド テ ヴォーリズ」では、（写真7）のように天井から、旧館からのペンダントライトが吊され、壁にヴォーリズ建築の写真が展示されヴォーリズ建築を楽しむことが出来る。また（写真8）の通り、当時から象徴だったピーコックのレリーフも御堂筋側に再設置されている。羽を広げた華やかなシンボルで、装飾の美しさを際立たせている。そして（写真9）の狐と鶴のステンドグラスや（写真10）のウサギと亀のレリーフなどイソップ寓話を基にした装飾が目立った。前述の豊郷小学校旧校舎にもウサギと亀の彫像があったことから、ヴォーリズが教訓や道徳といった意味でイソップ寓話を重要視していたのではないかと考えられる。

おわりに

これまで論じてきたように、ヴォーリズは建築が人間の精神性や身体の健康にまで影響を及ぼすと考えていた。そのため住宅建築では住宅のデザインよりも、住人が居心地の良い空間を作り出そうとした。実際にヴォーリズ建築事務所の作品集の序文の中で、デザインに左右される設計者の個人的名誉は、取るに足らないものであると述べている[43]。しかし、伝統的なアメリカの建築様式の手法を応用したデザインも高く評価されており、多数の学校建築や商業建築を生みだしたと考えられる。

本稿のねらいは、変容する都市の中で長く残されてきたヴォーリズの建築から、都市がどのように作られていったのかということを明らかにすることであった。ここで述べる都市とは、就業の場や生活の利便、あるいは文化の享受といったものを求めて人口の集中が起こり、その結果形成された大きなまちのことである[44]。第2章で述べた通り、関西学院大学西宮上ケ原キャンパスでは、ヴォーリズの設計したキャンパスを中心に学園都市が形成されたと考えられる。周辺の住宅は、キャンパスと同じスパニッシュスタイルをとり、建築デザインが統一された建物が立ち並ぶ都市空間ができた。また、同じく第2章で述べたように、ICUの設計からは、単なる建物を建てていたのではなくキャンパスそのものに都市的要素を組み込むことで、大学を中核とする文化的コミュニティが発展していく、未来

のある都市計画を作り上げていたことが分かった。以上のことから、都市の中でランドマークやコミュニティ形成という役割を担うヴォーリズ建築は、都市空間のイメージ形成や人の集まるコミュニティの中心となり、建築物の外部空間に都市を生みだしてきたのではないかと考えられる。都市空間は建築の内部と外部、両方があって初めて成立する。槇(2015)によると、「…都市の中で、いかに広場や道のような外部空間が内部空間と同じように歓びを与えるものでありえるか」[45]が都市をよりよくする発想であると述べている。ヴォーリズの建築は、内部空間と外部空間共に人々に歓びを与えるものであったと考えられる。

次に、膨張する都市の発展の中で、建築物の保存・再生はそれに逆進しているのかどうか、建築と都市の関係について考察する。今では、彼の建築物は都市を形成してきただけでなく、第3章の豊郷小学校のように、新たに観光地やロケ地としての利用も見られるようになった。建物の本質的意味だけでなく、そこから付随して生まれる価値を持っている。これは、建てられた後に「社会性を獲得していく建築」[46]であると言えるだろう。建築物が単に個人の所有の対象にとどまらず、社会の財産として機能しているのである。また、場所に対する人々の愛着を生みだす魅力的な場をつくることにも成功している。これによって、日常の都市空間で印象に残る建築物に出会う経験が人々の中にできるのだ。槇（2015）はコミュニティ・アーキテクトについて、ミニ・スケールプランニングが重要であると述べている[47]。大規模な再開発や国家戦略特区などではなく、もっと小さな単位で、日々街を見ている人の意見と研究者の交流によってコミュニティづくりが始まるということである。つまり、建物をどう維持するか、街の特性は何なのかと、地域に興味を持つ人が増えることによって、新しい都市社会や文化が創り出されるということである。ヴォーリズは地域を構成する家族という最小のコミュニティを重要視していた[48]。それぞれの家庭の在り方を問うことで人づくりを行い、その家庭の集まりによって地域のコミュニティを作ることで、彼の中の「神の国」思想に繋がっていったのだろう。また、彼の作品にとりわけ教育施設が多いのも教育、医療、福祉といった施設からの人づくり、そしてそれが街づくりに繋がっているという彼の精神からだろう。しかし現代の人づくりは、単純に福祉的な創造的資本を作ることだけではなく、再生活動など住民のコミュニティ活動の活性化にもあると考える。現代の都市の発展の中で、ヴォーリズ建築の保存再生による街づくりは、社会福祉的な資本の継承と共に、その地域に興味を持つ人を育てていくのである。それは結果的に都市の発展に必要な要素となり得るだろう。

ヴォーリズの建築物は、ただ都市の機能を果たすだけでなく、コミュニティを形成してきた。そうして生まれた都市は変容していったが、その後、現代になると地域住民主体の保存活動によって新たに都市の再生化、活性化が起こった。建物が都市を形成し、都市が変容していく中で、その建物の保存活動でもう一度都市を活性化させるという流れが非常に興味深い。槇（2015）は現在の社会的共通資本である都市について、都市空間の分断や人びとの住まいの隔離が進み、危機にあることを論じている[49]。また、「保存の努力がうまく蓄積していかないという課題」[50]があることも指摘している。ただ建物を残すだけでなく生かすこと、また都市空間で継続的に活用されることが重要になってくるだろう。これからの時代の建築に必要なのは、都市と建築物の空間から生み出されるコミュニティを重視した、ヴォーリズ精神の継承であると考える。

注

[1] 『ヴォーリズ建築3件が登録有形文化財に、合計数は最多の37件』
（CHRISTIAN TODAY、2008年9月28日付、2020年12月13日取得）
（https://www.christiantoday.co.jp/articles/2646/20080928/news.htm）

[2] ウィリアム・メレル・ヴォーリズ／株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所創業100周年記念事業委員会編、スタイナー翻訳ビューロー訳『アメリカ人教師の日本体験記』
株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所、2008年、pp.2-5。

[3] 奥村直彦『ヴォーリズ評伝～日本で隣人愛を実践したアメリカ人～』有限社港の人、2005年、pp.44-45。

[4] 奥村直彦「W. M. ヴォーリズの思想構造―「近江ミッション」成立期を中心に」（『キリスト教社会問題研究』第30号、同志社大学人文科学研究所編、1982年2月、p.327）。

[5] 奥村直彦、同志社大学人文科学研究所、前掲書、1982年、p.330。

[6] 筆者不明『近江兄弟社六〇年史第2分冊』（草稿）近江兄弟社社史編集委員会編、1965年、p.20。

[7] 近江兄弟社社史編集委員会、前掲書、1965年、p.20。

[8] 奥村直彦、同志社大学人文科学研究所、前掲書、1982年、p.338。

[9] 奥村直彦、同志社大学人文科学研究所、前掲書、1982年、p.338。

[10] 奥村直彦、同志社大学人文科学研究所、前掲書、1982年、p.345。

[11] 奥村直彦、同志社大学人文科学研究所、前掲書、1982年、p.331。

[12] ウィリアム・メレル・ヴォーリズ『吾家の設計』近江ミッション図書販売部、1923年、p.27。

[13] ウィリアム・メレル・ヴォーリズ、近江ミッション図書販売部、前掲書、1923年。

[14] ウィリアム・メレル・ヴォーリズ、近江ミッション図書販売部、前掲書、1923年、p.31。

[15] ウィリアム・メレル・ヴォーリズ、近江ミッション図書販売部、前掲書、1923年、p.94。

[16] 山形政昭『ヴォーリズの住宅「伝道」されたアメリカンスタイル』住まいの図書館出版局、1988年、p.60。

[17] 山形政昭、同上書、1988年、p.65。

[18] 山形政昭、同上書、1988年、p.64。

[19] ウィリアム・メレル・ヴォーリズ、近江ミッション図書販売部、前掲書、1923年、p.22。

[20] 山形政昭『ウィリアム・メレル・ヴォーリズの建築　ミッション建築の精華』創元社、2018年、p.28。

[21] 山形政昭、住まいの図書館出版局、前掲書、1988年、p.74。

[22] 山形政昭、創元社、前掲書、2018年、p.264。

[23] 山形政昭、同上書、p.264。

[24] ウィリアム・メレル・ヴォーリズ『失敗者の自叙伝』近江兄弟社・湖声社、1970年、p.290。

[25] 山形政昭、創元社、前掲書、2018年、p.71。

[26] 山形政昭、住まいの図書館出版局、前掲書、1988年、p.105。

[27] 境洋人「関西学院大学西宮上ケ原キャンパス ヴォーリズ空間を守り設計陣と40年の協働（Special Feature 生き続ける学校：人口減少・移動に対応し、地域ニーズをくむ；伝統継承）」（『日経アーキテクチュア』通巻1106号（pp.54-57）、2017年、所収、p.57）。

[28] 境洋人、同上書、p.57。

[29] 吉見俊哉「第四章　明日の大学　明日の都市―コミュニティとしての大学＝都市」（高澤紀恵・山崎鯛介編『建築家ヴォーリズの「夢」戦後民主主義・大学・キャンパス』勉誠出版、2019年、pp.99-116、pp.104-105）。

[30] 吉見俊哉、勉誠出版、同上書、p.107。

[31] 吉見俊哉、勉誠出版、同上書、p.113。

[32] 筆者不明「住民運動で転生した豊郷小学校（特集 保存・再生の経済学―「使う改修」で近代建築の価値を高める）―（保存のカラクリを解く）」（『日経アーキテクチュア』通巻907号（pp.64-67）、2009年、所収、p.64）

[33] 山形政昭「第一章　ミッション建築家ヴォーリズとICUのキャンパス計画」（高澤敏江・山崎退助編、「建築家ヴォーリズの「夢」戦後民主主義・大学・キャンパス」勉誠出版、2019年、pp.3-29、pp.21-22）。

[34] 山形政昭、勉誠出版、同上書、p.21。

[35] 筆者不明、前掲書、（『日経アーキテクチュア』通巻907号（pp.64-67）、2009年、所収、p.64）。

[36] 岡本健『ｎ次創作観光 アニメ聖地巡礼／コンテンツツーリズム／観光社会学の可能性』NPO法人北海道冒険芸術出版、2013年、p.52。

[37] 岡本健、同上書、p.28。

[38] 山形政昭、創元社、前掲書、2018年、p.280。

[39] 山形政昭、創元社、前掲書、2018年、p.280。

[40] 海野弘『万国博覧会の二十世紀』平凡社、2013年、p.64。

[41] 『ヴォーリズ建築探訪　大阪大丸百貨店（大丸心斎橋店）』
（一粒社ヴォーリズ建築事務所公式HP、2021年1月20日取得）
（http://www.vories.co.jp/work/special/2.html）

[42] 『文化的価値が高い既存建物の外壁保存構法を開発し大丸心斎橋店本館に初適用』
（竹中工務店公式HP、2020年4月20日付、2021年1月20日取得）
（https://www.takenaka.co.jp/news/2020/04/01/index.html）

[43] 山形政昭、住まいの図書館出版局、前掲書、1988年、p.66。

[44] 『都市計画制度』（長崎県公式HP、2019年2月8日付、2021年1月21日取得）
（https://www.pref.nagasaki.jp/bunrui/machidukuri/toshikeikaku-kokudoriyo/toshikei-seido/376674.html）

[45] 槇文彦・松隈博『建築から都市を、都市から建築を考える』岩波書店、2015年、p.124。

[46] 槇文彦・松隈博、同上書、p.121。

[47] 槇文彦・松隈博、同上書、p.101。

[48] 小山耕一『ヴォーリズ来日100周年記念特集』（『毎日新聞』2005年2月3日）。

[49] 槇文彦・松隈博、岩波書店、前掲書、2015年、p.93。

[50] 槇文彦・松隈博、岩波書店、前掲書、2015年、p.119。

参考文献

―著書―

ウィリアム・メレル・ヴォーリズ／株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所創業100周年記念事業委員会編、スタイナー翻訳ビューロー訳『伝道と建築　W. Mヴォーリズとその兄弟たち』株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所、2008年。

ウィリアム・メレル・ヴォーリズ『吾家の設備』近江ミッション図書販売部、1923年。

―論文―

石井和浩「ヴォーリズ建築の保存再生によるまちづくり」（公共社団法人日本建築家協会編『JIA MAGAZINE 306』2014年8月号、所収）。

奥村直彦「W. Mヴォーリズの経済思想―「近江ミッション」の産業的実験―」（同志社大学人文科学研究所編、『キリスト教社会問題研究』第31号、1983年、所収）。

奥村直彦「ヴォーリズ夫妻の教育思想と「近江ミッション」教育事業の展開」（同志社大学人文科学研究所編、『キリスト教社会問題研究』第45号 1996年、所収）。

奥村直彦「3「大林こどもの家」：戦時下における民間保育（融和）事業の一事例（III-7部会教育と近代）」（出版社不明、『日本教育社会学会大会発表要旨集録』第43号、1991年、所収）。

山村和宏「06 ヴォーリズ建築保存再生運動―地域再生における創造的資本の継承と発展の事例―」（大阪市立大学大学院創造都市研究科「3セクター協働の地域活性化教育プログラム」運営委員会編、『地域活性化ニューズレター』第3号、2012年、所収）。

―WEBサイト―

板倉秀典「大丸心斎橋店、86年ぶりに建て替えた本館がついに開業。旧本館から復元した内外装を見てみた」（トラベルWatch、2019年9月13日付、2021年1月20日閲覧）（https://travel.watch.impress.co.jp/docs/news/1208486.html）

事例番号094「近江八幡市「波打ち際」の風景ができるまち」（まち再生事例データベース：国土交通省　都市・地域整備局、2005年付、2020年3月4日閲覧）（https://www.mlit.go.jp/crd/city/mint/htm_doc/db/094oumihachiman.html）